モチ揉め太郎

シロガネユキ

モチ揉め太郎

「モチ揉め太郎」シロガネユキ

　昨日も朝昼晩、全て餅料理……今朝も磯辺焼を食べたばかりだ。

　そもそも一人暮らしの癖に、見栄で年末に大きな餅の板を二枚も買ったのが間違いだった。本当は餅なんて嫌いなのだが、米屋の娘、米子ちゃんに少しでも気前のいいところを見せかったのだ。この健気な男心……君に分かるかい？

　僕は網の上に餅を二つばかり置き、火にかけて焼きあがるのを待った。

　プク～。

　餅が膨らみ始めた。箸を構え、餅とにらめっこしながら取るタイミングを見計らう。

　すると膨らみ始めた餅が妙な形になりだした。縦に長く３０センチ程膨らんで、一部が四方に伸びて人間のような形になり始めた。

「むむ。餅人間か？」僕は格闘技の達人のような型を構えて言った。

　予想通り、餅はすっかり人間の形になった。歳の頃は７０位だろうか、見事な顎髭をたくわえている。顔立ちはほりぶかく、渋味がある。

　餅人間は完全に人の姿になると落ち着いた声で話し始めた。

「ワシはお餅の普及名誉会長であるモチ揉め太郎である。今回、おぬしのモチへの貢献をたたえて、一つだけ願いを叶えてやろうと思い、現われたのだ」

「ま、マジッすか？　えっと、じゃあ、米屋の米子ちゃんとラブラブに……」

　そこまで言って僕は躊躇した。まてよ、本当に一つだけ願い事を叶える事が出来るのであれば、米子ちゃんじゃなくて、超人気アイドルの名前を挙げた方が得なんじゃないか？　いや、いっそのこと全ての女の子から好かれるってやつはどうだ？　そうだ、そうしよう。これで米子だけじゃなく、近所の松子ちゃんも幼馴染の竹子ちゃんも、あの超人気アイドルの梅子ちゃんも僕のもの……。

「よし、決まった！　僕の願いはどんな女の子からも好かれ……あ、あれ？」

　そこに餅人間の姿はなかった。ふと見るとモチ人間は既にしぼみ、網にべったりとこびり付いているではないか。

　僕は肩を落としながら、こびり付いた餅人間を割り箸でガリガリと落としながら考えた。

　いつかまたモチ揉め太郎が現われたら、その時はきっと米子ちゃんだけに絞ろう。いや、でも松子ちゃんも捨てがたいし、アイドルの方がお得だし……ああ、こうやって悩んでいるうちに、またモチ揉め太郎に決断を迫られたらどうしようか……と。

　この複雑な男心……君に分かるかい？